

生徒が主体的に取り組む探究活動の実践

～「筑坂魅力化プロジェクト」実践報告～

筑坂魅力化プロジェクト担当 本弓康之 北野啓子 中台昇一
Russell Smith 浅野理就 高林拓也 西村栄哉

本校はこれまで様々な探究学習に取り組み、探究学習の運営について様々な経験的蓄積がある。令和2年度は新型コロナウイルス感染症により生徒の探究学習の機会が制限された状況であった。そこで、生徒の探究学習の機会を増やすように期間限定の探究学習プログラム「筑坂魅力化プロジェクト」を立ち上げ、本校の探究活動の運営に関する経験的蓄積をふまえ実施した。この取り組みはプロジェクトの目的を生徒に示して実施した探究活動であったが、生徒の主体性が見られる様々な生徒の探究活動が行われた。

キーワード 探究学習 グループ探究 異学年交流

1. はじめに

本校では現在、2年次 T-GAP、3年次卒業研究、国際フィールドワーク等の様々な探究学習に取り組んでいる。これらの取り組みは、本校の様々な探究活動の実践経験をふまえ、生徒が主体的に取り組めるように修正を加えながら実践を重ねてきた。

令和2年度はこれらの探究学習を継続しながらも、新型コロナウイルス感染症により生徒同士が対面で探究活動を行うことが難しい状況であった。そこで、生徒同士の対面での探究活動が可能になった令和2年2学期から生徒の探究学習の機会を増やす取り組みを企画し、異学年交流による期間限定（9月から11月までの2学期のみ実施）の探究学習プログラム「筑坂魅力化プロジェクト」を立ちあげ実施した。この「筑坂魅力化プロジェクト」では、探究活動の課題設定を表1のように事前に生徒に提示し、探究活動の具体的なアクションまで示す探究学習教材「Classi×マイプロジェクトサポート」を活用するなどの特徴があり、さらに本校の探究活動に関する経験的蓄積をふまえ企画し、実施した。

ここでは、本校の探究活動の運営に関する経験的蓄積を踏まえた「筑坂魅力化プロジェクト」に関する探究学習の運営の工夫とその成果等について報告する。

2. 探究活動の運営に関する注意点

探究活動は、課題設定・計画・実施・ふりかえりといった基本的な探究の流れがあり、探究活動に関する様々な教材（例えば、探究学習教材「Classi×マイプロジェクトサポ

ート」）を使用することが可能である。ここでは、これらの探究教材等を活用し、学校として探究活動の運営に具体的に取り組む場合に、特に必要な注意点について述べる。この運営に関する注意点はこれまでの本校の様々な探究活動の経験的蓄積から得られたものである。

● 課題設定

探究活動を行う生徒すべてが探究活動の初期段階において明確な課題意識や主体性を持って探究活動に取り組んでいるわけではない。そのため、探究学習の初期段階から生徒が探究活動の課題設定を行う場合には、生徒が問題意識を探しながら主体的に課題を設定することが特に重要であり、探究活動の計画には課題設定の時間を十分に確保する必要がある。また、生徒が課題設定から具体的な活動計画を作成する際にも十分な時間が必要となるため、その時間も確保する必要がある。

● グループ作り

グループ探究では、生徒間の人間関係の変化や目的意識の共有状況によって探究活動のそれぞれの段階（計画・準備・実施等）で様々な問題や影響が表れる。しかし、グループ探究ではこれらの様々な問題や影響を生徒自身が乗り越えることが探究学習の目的であると教員側が十分に理解し探究活動の運営を工夫することで、生徒が探究活動における課題解決を行うと同時に生徒自身が新たな気づきを得る学習の機会となる可能性がある。

本校の探究学習の経験から、グループに参加する人数によって探究活動の進め方に違いが出ることがわかっている。グループの人数が比較的多い場合には、探究活動に対するアイデアが多く集まりすぎるためグループの意思決定や役割分担に時間がかかり計画や実施までが遅れる傾向にあり、また逆に、グループの人数が比較的小さい場合には、グループの意思決定や役割分担は比較的短時間で決まるものの生徒の1人あたりの役割の負担が重く、結果として計画や実施が遅れる傾向にあることがわかっている。さらに、グループ探究では、グループ探究を取りまとめるリーダーが不在の場合には、探究活動に関する具体的な方針・意思決定が決まらず探究活動が進まない傾向があることもわかっている。

● スケジュール管理

探究活動を実際に行っていくと生徒が考えていた予定とは異なる状況が現れ、探究活動の予定が大幅に遅れていくことがある。そこで、探究活動の予定の遅れが生じないようにするために、定期的な生徒の活動状況の確認、プレゼンテーションによる活動報告や活動報告書の提出など必要な探究活動の節目（マイルストーン）を事前に生徒へ提示することで、生徒の活動状況の把握と生徒への教員の適切な関与が可能になることがわかっている。

● 教員の関与

探究活動では教員がどのように生徒の活動に関与するかによって探究活動の質が大きく影響を受ける。教員の関与が強い場合には、生徒の探究活動に対する生徒の意識が受動的になり（生徒は探究活動を結果的にやらされていると思うようになる場合が多い）、生徒の主体的な活動を伴わない探究活動になる可能性がある。またその一方で、教員の関与が弱い場合には、探究活動により生徒の内面で混乱（生徒の考えと課題設定の相違、生徒間での課題意識の相違など）が生じ、生徒の探究学習への意欲が低下したり、生徒の思いが先行し教員の関与がないまま探究活動が行われたりするなどの様々な予想のできない問題が生じることがある。さらに、探究活動への教員の関与の影響は、探究活動を実施する期間が長くなるほどその影響が大きくなる傾向があり、探究活動の運営計画では慎重に教員の関与について検討する必要があることがわかっている。

● 探究活動の評価

探究活動の最終的な目標は、生徒が自立的な学習者になることであるが、学校での探究活動は生徒が自立的な学習者になるための段階の一部にしか過ぎないため、探究活動による学習の成果を評価することは難しい。特に探究活動の学習の成果は生徒の内面的な変化も含まれるため数値的に評価できない場合もある。しかし、生徒の探究活動を評価することは、生徒の達成感や主体的な学びを喚起する機会となることもあるため、客観的で適切な評価を行う必要がある。この探究活動における評価は、教員による評価だけではなく、外部による評価、生徒相互による評価も、生徒の探究活動に対する意欲を向上させるなどの効果があるため、探究活動の運営計画においてどのような評価を行うかも探究活動の運営において重要となる。

（表1）生徒に提示した筑坂魅力化プロジェクトの目的

【筑坂魅力化プロジェクトの目的】

- ・筑坂のグローバル化を進化させる
 - ・グローバル化を目指す筑坂をアピールする
 - ・筑坂から日本のグローバル化を推進する
 - ・多くの中学生が行きたい、保護者が通わせたい、魅力ある筑坂にする
1. 筑坂の魅力を進化させる
筑坂の魅力を高めるために、新たな視点で問題を解決する。
 - 標準服チーム：制服を標準服にする場合に想定される問題とその解決策（試行も含む）
 - 多様性チーム：多様な生徒に対応するために想定される問題とその解決策
 - ICT チーム：高度な ICT に対応するために想定される問題とその解決策
 2. グローバル化を目指す筑坂の魅力をアピールする。コロナ渦により筑坂の情報が伝わらない状況の中で、新たな視点で情報を発信する。
 - 広報チーム：中学生とその保護者へ情報を伝達するために想定される問題とその解決策
 3. 筑坂の魅力を高めるため、筑坂から日本のグローバル化を推進する
 - イベント企画チーム：中学生も参加できる筑坂の活動を行う場合に想定される問題とその解決策

3. 「筑坂魅力化プロジェクト」の概要

本校の探究活動に関する経験的蓄積をふまえ、この「筑坂魅力化プロジェクト」では生徒の探究学習の機会を増やす異学年交流による期間限定の探究学習プロジェクトとして企画したことから、以下のような運営方針でプロジェクトを企画運営した。

● 課題設定

この探究活動の活動期間を9月から11月までの約3か月と限定したため、この探究学習において比較的必要な課題設定の期間を短くする必要があった。そこで、表1に示すように生徒にとってわかりやすい目的を事前に教員側で設定し提示した。このようにプロジェクトの目的を事前に提示することで、具体的な活動計画の作成と実施がプロジェクトの目的であることを生徒に印象付けるねらいがあった

● グループ作り

このプロジェクトの主な目的は表1のように生徒の学校活動にかかわる活動が多いため、本校の生徒会を中心として活動を希望する生徒が自由に参加できる取り組みとした。このように明確な目的意識を持った生徒を集め生徒会を各プロジェクトの責任者としたことで、具体的な計画・実施までの時間を確保しグループの方針・意思決定が確実に行われるように工夫した。

● スケジュール管理

期間限定のプロジェクトのため、大まかなスケジュールを表2のように事前に提示し、10月に中間報告会、11月に最終報告会を行い、11月末までに最終報告ができる状態でプロジェクトを終了することを生徒に印象付けた。また、週1回程度のプロジェクトチームリーダー会議を行い各プロジェクトの進行状況を共有できるようにした。

(表2) 生徒に提示した主な日程

8月31日・9月1日
グループ作り
9月 計画・調査
10月 実施
中間成果発表
11月 成果発表
最終報告

● 教員の関与

教員の関与が探究活動に影響を与える点を考え、担当する教員にできるだけ教員側が生徒に探究活動の具体的な指示を与えないことを求め、教員がファシリテーターの役割に徹するように求めた。また、生徒の探究活動の状況を教員側が常に把握できる状態を作るために、生徒には担当教員への「報告・連絡・相談」を徹底するように指示を出した。

● 探究活動の評価

このプロジェクトは、任意の活動であり希望した生徒による探究活動のため、探究活動を評価する必要はない。

しかし、探究活動を評価できる状態にしておくことは、生徒のふりかえりを促す効果等もあるため、中間報告会・最終報告会などのプレゼンテーションを生徒間や外部の方に公開したり、最終報告書をHPに公開するなどしたりすることを行った。

4. 活動の成果

このプロジェクトでは(表1)に示したプロジェクトの目的と(表2)に示したプロジェクトの日程を生徒に示したのみで、生徒がどのようなプロジェクトを具体的に行うかは各プロジェクトチームに任せたため、短期間でどのようなプロジェクトの成果があるかは全く予想できなかったが、各プロジェクトチームは(表3)に示すような活動を具体的に行った。【資料1】から【資料4】は生徒が作成した活動報告書である。

(表3) 各プロジェクトチームの主な成果

標準服チーム
・標準服テスト期間の実施
広報チーム
・インスタグラム
・TikTok
・ポスターの作成
・中学校へのポスター配布
ICTチーム
・ワークショップの実施
イベントチーム
・オンライン交流イベントの実施
多様性チーム
・意見箱の設置



(図1) 広報チーム作成のポスター

5. プロジェクトでの生徒の変容

このプロジェクトの探究の過程でも、本校の探究活動でこれまで見られた経験的蓄積と同様に、グループ内で意思統一や役割分担の混乱が生じ、一部のプロジェクトチームでは探究活動に対する意欲の低下が見られた。

これらは本校の経験的蓄積から予想されていた混乱であり、この混乱を生徒の学習の機会であると捉え、教員側も生徒へのアドバイス程度の指示にとどめ、生徒間で解決するように促した。教員の関わりを制限したファシリテーターの役割としたことで教員の一時的な精神的負担があったものの生徒間でこれらのグループ内の問題を解決する姿が見られた。【資料5】は、担当した教員による各グループの精神的な変容に関するコメントである。

また、このプロジェクトで探究活動の取り組みに対する生徒の精神的変化が見られることが予想された。そこで、このプロジェクトでは探究学習教材「Classi×マイプロジェクトサポート」のプロジェクトグラフによるふりかえりを活用し生徒の精神的変化を把握する試みを行った。【資料6】は、プロジェクトグラフによるふりかえりをおこなった生徒のプロジェクトグラフである。このプロジェクトグラフを見ると、生徒の探究活動に対する取り組み様子は様々であり、探究活動以外の要素（他の探究活動や学習状況等）によって生徒の探究活動への意欲が変化していることがわかる。

6. おわりに

今回実施した「筑坂魅力化プロジェクト」は、想像した

以上に生徒の主体性が見られる様々な生徒の探究活動が行われ、探究学習の効果があったことがわかった。

さらに、この取り組みにおいてもこれまでの本校の探究活動の経験的蓄積と同じような傾向がみられたことから、探究活動の企画運営に関して以下の注意点が特に重要であると考えられる

- 探究活動に対する生徒の意欲を尊重した探究活動を企画計画すること。
- 探究活動を行う際に生じる様々な問題は生徒間で問題を解決するように促すこと。
- 探究活動全体に対するスケジュールを生徒に提示し計画的に探究活動を行うように促すこと。
- 教員は生徒の探究活動に積極的に関わるのではなく、ファシリテーターとして生徒間で問題解決を促す役割に徹する方が、探究学習の学習効果が高い。

これらの探究活動の注意点を生かすためには、教員側が探究活動を生徒が自立した学習者になるための段階の一部であると捉え、生徒が探究活動において困難を乗り越えたり失敗を経験したりすることが探究学習の成果であると理解し探究活動を計画することが教員側に求められている。今後も、様々な探究活動の実践経験をふまえ、生徒が主体的に取り組めるように修正を加えながら探究活動の実践を重ねていきたい。

【参考・引用文献】

- ・加藤敦子ほか (2018). 平成29年度「T-GAP」実践報告. 「筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要」第55集. 31～52.
- ・熊倉悠貴ほか (2018). 平成29年度「卒業研究」実践報告. 「筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要」第55集. 53～64.
- ・北原立朗ほか (2019). 平成30年度「T-GAP」実践報告. 「筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要」第56集. 27～43.
- ・加藤敦子ほか (2019). 平成30年度「卒業研究」実践報告. 「筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要」第56集. 44～75.
- ・今野良祐ほか (2020). 令和元年度「T-GAP」実践報告. 「筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要」第57集. 29～38.

- ・ 塗田佳枝ほか（2020）. 令和元年度「卒業研究」実践報告. 「筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要」第 57 集. 39～27.
- ・ 建元喜寿ほか（2019）. 平成 30 年度 国際教育推進委員会活動報告. 「筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要」第 56 集 68～72.

筑坂魅力化プロジェクト 活動報告書

標準服チーム

目的

制服を標準服にした場合に想定される問題とその解決策の具体案を提案し実施する

標準服化トライアル（方法、結果）

（方法）

トライアル期間用の簡単なルールを作り、約2週間実際に標準服を試す。

（結果）

全校生徒の約8割が私服を着用して登校してきた。

トライアル事前・事後アンケート

（方法）

Classiにてアンケートを作成し、生徒の中の今の制服や標準服化に対する意見がトライアルの前と後でどのように変化するか調査した。

（結果）

事前アンケートでは、標準服化に対して否定的な意見が多かった。

事後アンケートでは、肯定的な意見が増え、生徒の意識の変化が確認できた。

ディスカッション

（方法）

標準服チームで集まり標準服化に対する意見や各クラスの状況を報告し話し合う。

（結果）

標準服化にむけた簡単な心得の作成や、各学年の生徒の様子を確認することができた。

考察（結果から考えられること）

生徒の標準服化に対する意見やイメージは、社会や学校の状況に合わせて常に変わっていくので、その都度見直しや簡単なルールの変更を行うことができる機会を設ける必要があると感じた。

探究を通しての新たな課題

- ・定期的に見直しや話し合い、振り返りを行う機会を設ける必要がある。
- ・生徒にもう一度、「どのような服装が学業を行うのにふさわしいか」「なぜ標準服化するのか」を考えてもらう機会を作る。

筑坂魅力化プロジェクト 活動報告書

広報チーム

目的

標準服化をメインとした、筑坂の魅力を生徒目線で埼玉県受験生とその保護者に発信する。

実行したこと（方法・結果）

【1】現在の筑坂の広報活動の未到達点を洗い出す、中学生に情報を届けるまでの方法とそれに適したツールは何か確認。

（方法）

広報チームのメンバーに筑坂を知った、志望したいきさつを確認する。

（結果）

親戚や兄弟が筑坂の卒業生で、実際に筑坂内部の詳細を聞いたからが最多。

→筑坂に全くルーツがなく、ポスターやHP、学校パンフレットのみでは、魅力が伝わっていない。知名度が低い。

【2】知名度が低い、詳細が生徒に届いていない事実から、中学生が親しみやすいツールのSNS運営を開始、担当グループを編成

（方法）

Instagram、TikTok、HP、データ管理班をそれぞれ編成。各SNSでは、生徒目線の筑坂を決まった日時に投稿することに決定。Instagramは月曜日と木曜日の17時更新。TikTokは毎週金曜日更新。HPは毎週金曜日18時更新。

（結果）

生徒目線のコンテンツを作成することができた。SNSのリスク管理をしたことで、（投稿前の確認と、モザイク処理）トラブルはなし。

（反省）

- ・班のメンバーが少なく、コンテンツ作成が追い付かないことがあった。
- ・その投稿で何を伝えたいのかがあいまいになることがあった。
- ・筑坂生向けのイベントで、筑坂生限定の記載をしていなかった。（訂正済）

【3】ポスター作製

（方法）

データ管理班の手が空くことが多かったため、ポスター制作に移行。各々がポスター案を出しあい、作成。時代にビントを合わせろというキャッチコピーの作成。デザイン開始から印刷終了まで約半月。

（結果）

生徒が一から作成できた。

魅力化プロジェクトを代表する形あるものとなった。

(反省)

デザイン性、スタイリッシュさと情報量のバランスが難しかった。製作開始から完成までの時間がかかった。何を伝えたいのかのコンセプトがブレることがあった。

【4】ポスター配布 生徒にボランティア募集

(方法)

筑坂生に、出身中学や塾にポスターを直接渡しに行ってもらった。11/5(木)に各クラスSHでボランティア募集の呼びかけ。翌日金曜日の放課後に商業実践室で説明会を開く。

(結果)

多くの中学校や塾に、生徒が作成したポスターを配布することができた。

(反省)

名簿やクラッシ上で、訪問予定中学、塾、名前を確認してはいたが、全員分しっかり記録できているとは言えず、信憑性が低い。ポスターを持って行ってもらう際、このポスターができていきさつや標準服化の意義など、チェック項目のプリントを作成せず口頭連絡だったため、全ての場所に正確に伝わったかどうかの確認ができない。(広報代表の塩川が作成した学校送付メッセージ上ではある程度説明済み)

【5】最終発表に向けて準備、SNS コンテンツ強化

(方法)

最終発表に向け、各班で発表用 PowerPoint を作成。また、個人が忙しく SNS の更新頻度が下がっている現状を踏まえ、コンテンツ作成は広報全体でテーマ別に分担し、更新頻度を下げないようにした。

(結果)

最終発表の五分間では、四グループで一分程度、時系列で発表できた。

(反省)

全体で SNS コンテンツ作成を共有すると決めると、個人の主体性が下がり、結果的に一つもコンテンツが完成しなかった。自分がやらなくても誰かがやってくれるだろうという思い込みや安心感が悪い方向に発生してしまった。

【全体を通して】

三か月間の魅力化プロジェクト内では、SNS や HP、ポスター作製、配布などの活動を行い、週に2回以上は集まるなど、活発に活動できた。しかし、広報グループの集まりは全員が集まりやすい昼休みに限定していたため、一度のミーティングでは15分～20分が限界だった。お昼休みなのでメンバーにとっても急がなければならず、負担になってしまっていたかも知れない。今回広報活動では、少しの効果は得られたものの、まだ SNS フォロワーや閲覧回数が少なく、ここで活動全体を終了させてしまうと今までの努力がもったいないと考えた。ということで、グループ全体として広報チーム自体は存続させることとなった。メンバーの変動や形態の変形をしながらも、この三か月間で培った生徒広報活動の基盤を使い、定期的に中学生、受験生、その保護者にエールを送り続けていきたい。

筑坂魅力化プロジェクト 活動報告書

ICT チーム

目的

高度な ICT に対応するために想定される問題とその解決策を提案し実施する

調べたこと/実行したこと（方法、結果）

（方法）

第一回ディスカッション テーマ「フェイクニュースに惑わされるな！！」

日時：10月22日（木） 16時～ @多目的交流棟

（結果）参加者：11名

事後アンケートの結果から、ディスカッションを通じて「新しい発見を得ることができた」と回答した人が84.6%いた。具体的にどのような発見があったかを問うと、「多角的に物事を見る事ができた」や、「情報を100%信じるのは良くない」などの結果が得られた。このことから参加者は今後高度な ICT に対応する際に想定される解決策を自身で考えだすことができるのではないだろうか。

（課題）

- ・グループごとにディスカッションを行なった為、進捗状況にズレが生じた。
- ・広報活動に問題があったと考えられるが、参加人数が少なかった。
- ・テーマに対しての具体的な答えがなかった為上手くまとめられなかった。

（方法）

第二回ディスカッション テーマ「写真でバレる個人情報」

日時：11月12日（木） 16時～ @物理教室

（結果）参加者：17名

- ・前回のディスカッションでの反省を生かし、テーマに対しての具体的な答えを設定した。
- ・テーマをかなり身近なものに設定した為、自分の意見や思った事などを活発に発言して質の高いディスカッションを実施することができた
- ・事後アンケート結果から、「客観的にインスタの投稿を見ることにより、想像以上に簡単に個人情報が写真から見て取れることがわかった」など一枚の写真から多くの情報を読み取れることを参加者に伝えることができたのではないかと考えられる。

（課題）

- ・参加者の人数を把握できなかった為、グループ分けに時間がかかった。
- ・前回のディスカッションとは異なり、今回は明確な答えを用意していた為グループによっては想定よりも早く終わるグループがあった。

考察（結果から考えられること）

講習会等を開くよりもディスカッションを実施することによって、生徒自身は「教わる」のではなく、自分で「考える」ことができるので、生徒の理解・関心をより深めることができたのではないかと考えられる。第一回ディスカッションでは、身の回りには多くのフェイクニュースがあることを伝えることができ、情報の信憑性等を踏まえながらどうすればフェイクニュースなどの間違った情報を見極めることができるのか考えることができた。また、第二回ディスカッションでは ICT の中でも高校生に身近である SNS をテーマにディスカッションを行うことで生徒自身が今後 SNS を利用する上で気をつけなければならない事・想定される問題点を自身で身につけることができたのではないだろうか。

探究を通しての新たな課題

計 2 回のディスカッションでは大まかなテーマを SNS に設定し、馴染みやすいディスカッションを企画することができた。だが、ICT の分野は広くあり、その一部分しかディスカッションで話し合う事ができなかった為、ICT が抱える問題点や社会への必要性などを一部しか伝えることができなかった。

<ディスカッションの様子>

第一回ディスカッション @多目的交流棟



第二回ディスカッション @物理教室



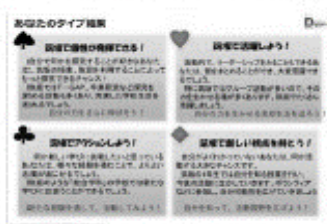
筑坂魅力化プロジェクト 活動報告書

イベント企画チーム

筑坂魅力化プロジェクトのイベントチームでは、ICT を使って中学生と交流できるイベントを開催しました。そこでは、インスタグラムのライブ機能を使って誰でも気軽に参加できるような形で開催しました。また iPad やポケット Wi-Fi などを使い、同じ筑坂魅力化プロジェクトの広報チームと連結してイベントを行ないました。

I. 筑坂適性診断

筑坂に興味のない中学生はインスタライブに来てくれないと考えたので、興味のある中学生にイベントの存在を知ってもらい、また筑坂にさらに入りたいと思ってもらえるように筑坂適性診断というものを作りました。



目 的	筑坂に興味があっても何をしたいかわからない中学生に向けて自分のやりたいことをイメージできるようにするため
方 法	選択肢の先を何個にするか、選択肢の記号を ABC にするのか 123 にするのか、筑坂に興味がない人でも興味を持ってもらえるような項目が作れるかの準備
効 果	視聴者の学びや自分の関心を見つめなおすきっかけを作れた

II. 模擬部活動体験

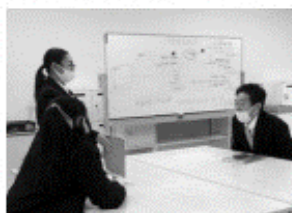
先生目線ではなく生徒目線からの筑坂を中学生に伝えるべく、部活動の披露の場が少なくなってしまった部活動をメインに活動の概要をお聞きしました。またインタビューだけでなく披露などをしてもらって具体的な活動内容をお見せしました。



目 的	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍で体育祭や文化祭等の学校行事が中止になり、数多くの生徒の活躍の場が失われてしまった。そのため、筑坂の部活動が活躍できる機会を設けたかったから ・コロナ感染拡大防止のためオンラインでできるイベントを行うため ・文化祭がなくなってしまう活動が少なくなってしまう運動部に披露してもらうため
方 法	<ul style="list-style-type: none"> ・各部活動の魅力を部員から聞き出しておいた ⇒質問内容の整理し各部活動へ確認に行った ・撮影の許可、撮影する場所の確認を行なった ・Wi-Fiを契約し、校内のどこで行われる活動でも取材できるようにした
効 果	<ul style="list-style-type: none"> ・部活動での先輩後輩同士の雰囲気の良いさを視聴者へ発信できた ・部活動の様子を動画の公開やインタビューを通して視聴者へ発信できた ・リアルな筑坂生の声を校外へ発信することができた

III. 先生インタビュー

進路に悩んでいる中学生を手助けするため、またこのインタビューが学校を決める際の参考となればと思い行なった。



目 的	<ul style="list-style-type: none"> ・筑坂は総合学科であり、普通科と比べて異なる点が多い。そのため、筑坂での学びの様子について各科目群に詳しい先生がたから授業の内容や生徒の様子を聞き出すことで、中学生が想像できない高校の授業というものをイメージできるようにする ・オンラインで気軽に質問しやすい環境を作るため ・筑坂の科目群を紹介するため
方 法	先生にインタビューする内容を事前にチームに分かれて確認して、撮影前に先生に確認をとること
効 果	<ul style="list-style-type: none"> ・各科目群の授業の概要や、中学と違った高校の先生を伝えられた ・中学生が想像できない「高校の授業」というものを伝えられた

【資料5】担当教員によるコメント

A 教諭

生徒は正解を知りたがるがよくあります。しかし「探究」は正解が1つでないもの、正解のないものを追い求めていく行為です。今回のプロジェクトを通じて、参加した生徒は自分たちでやりたいことと社会的に求められていることの接点を考え、目的を設定して、アクションするというを行いました。これら一連の活動によって「先生、これでよいのでしょうか」とよく聞いていた生徒が「私たちはこういうことがやりたくて、それにはこれこれの理由・目的があります」と主張するようになっていきました。

B 教諭

最初は、生徒はどう進めれば良いか、教師からアドバイスを求めたが、今は、私と相談せず自ら今後の計画を建てている。すごく悩んだ生徒もいた（特に男）。何を作れば良いか、どうやれば良いか。しかし、ヒントを与えたら、動きがよくなり、今は一番活動している。リーダーは、最初は緊張して、どうすれば良いか迷っていたようだが、役割に慣れて、自然に指示したり、意見を聞いたりしている。特に、アドバイス、意見を頼んで、ディスカッションをリードすることが上手になった。計画性（時間のスケジュール）はまだまだ下手だ。が、すこしずつ気が付いたようで、スケジュールを固めようとし始めている。

C 教諭

生徒は、最初は自分たちのやりたいことをやりたいようにできるということに大きな期待を持って臨んでいたように思います。しかし、いざ始めてみると考えなければならないことや細かなやらなければならないことが山積みになって思考停止してしまいました。そこで、to do リストを作成して整理することを勧めましたがそれも上手くいきませんでした。なぜなら、2年生（特にリーダー）が目の中のことで一杯一杯になってしまったために、全体への情報共有もなされず、考えなければならないことや細かなやらなければならないことが何であるのかすら誰も把握できなくなってしまったからです。この結果、生徒達（特に1年生）は参加意欲やプロジェクト内での自己存在感を失っていきました。現在、イベント実施が目前に迫って全員がそれなりに「なんとかしなければ」という気概を持って努力しています。これがどう落ち着くかはもう少し様子を見る必要があります。

D 教諭

生徒主導の探究活動をコーディネートするというのは生半なことではありません。当然、こちらの想定しないところで躓きますし、伝わらないことも沢山あります。また、コミュニケーション不足故の軋轢なども起こります。しかし、それを教員が何とかしてしまつては、生徒は何も学びがありません。教員は、生徒が数多くの壁にぶつかり、上手くいかない様子を把握したうえで、その壁を乗り越えるために必要な最小限の援助をすることが必要です。あまり早く解決しようと躍起になってはいけませんし、生徒が苦しんでいる様子を分かっているながらも心を鬼にする場面もあります。ある程度の着地点などを教員が決めている分、普段の授業などで探究活動をするよりもかなりの精神力と忍耐が求められる印象です。

【資料6】プロジェクトグラフ

